Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2009, Vol.19, 241-244

資 料

「場の空気を読む子どもたち」に関する実証研究

金　子　　満〔鹿児島大学教育学部（地域社会教育）〕

Experimental study on "Children sensitive to situation"

KANEKO Mitsuru

キーワード：子ども実態調査、子ども劇場、子ども村事業、社会教育

１．はじめに

少子化、核家族化、都市化、情報化、国際化など、近年、我が国の社会の急激な変化により、人々の価値観や生活様式が多様化する一方で、社会的な傾向として、人間関係の希薄化、地域のつながりの希薄化が指摘されている。またメディアを中心に、いじめや不登校、校内暴力の増加、家庭や地域においては、犯罪の低年齢化や問題行動の増加など、子どもを取り巻く環境も急激な社会変化の中で悪化の一途をたどっているという文脈で報道が展開している。例えば、2004年に起こった長崎県における児童殺害事件のほか、子どもに関わる重大事件の続発、育児の孤立化による児童虐待やネグレクトの増加等へのマスコミの着目は、より子どもたちの「不気味さ」「不可解さ」ばかり強調される結果となり、われわれは、これらの言説にほぼ疑問を抱くことなく半ば日常的な出来事のように聞き流している。特に近年では、これらの青少年たち動向が現在の大人社会から見てあまりにも不可解なため、彼らが住む世界を＜異界＞と表現するケースも見られるようになった。

しかし、こうしたマスメディアを中心とする近年の言説に対し、警鐘を鳴らしつつ、改めて青少年たちの世界である＜異界＞をきちんと探索しなければならないのではないかという視点も研究者を中心に叫ばれるようになった。例えば、子どもの世界を「異文化」として捉えなおす必要性を述べた本田和子は、「子どものことを『わかっていた』と思っていたことの妄想性に気づかなければ」ならないと述べており、改めて近年の青少年の動向に対する研究の蓄積が必要であるとした。また、著書『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』において土井隆義は、千石保の著書『マサツ回避の世代』を引き合いに出しながら、他人との衝突を避けようとお互いに「場の空気」を読み合いながら学校を過ごす生徒たちの生き辛さを表現した。このように本田や土井の研究は、まさにこれまでの子ども観に対するパラダイム修正に匹敵するようなインパクトを秘めているといえる。

そこで、本研究ノートでは、近年の少年少女をより深く理解するため、主に土井隆義が述べる少年少女による「空気を読みあうやさしい関係」に関する視点をモチーフにしながら、これらの問題をより実証的に明らかにすることを目指すことにする。

２．研究の方法と視点の吟味

「場の空気を読む」子どもたちというタイトルの通り、子どもたちの普段の人間関係について分析するためという点や、問題の主旨が漠然としており研究者側の視点がまだ曖昧である点等を考慮して、子どもたちに対するグループインタビュー調査を実施することにした。また、①なるべくリラックスした状態を保つ、②なるべく先入観を入れない、③子どもたちが話しやすい話題を中心にするという条件を設定する努力をした。その結果、鹿児島のＮＰＯ法人である「子ども劇場」が毎年主催する「子ども村」事業に参加した子どもたちを対象に、ランダムに５人抽出し、彼らが話し合い等、普段の活動で使用している公民館の談話室を準備し、おやつやジュースを準備しながらリラックスした雰囲気で調査を実施した。その際、調査対象者には、「子ども村」での思い出話を聞かせてほしいという内容だけを伝え、本来の

趣旨である「場の空気を読む」子どもたちに関する情報は一切提示しなかった。

今回対象としたのは以下の５人であり、ＢとＤ以外は、別々の学校に通っている。なお、個人名が特定できないように学校名等の情報は提示しない。

（A）高校２年生　男子　子ども村事業４回目
（B）中学校１年生　女子　子ども村事業５回目
（C）小学校６年生　男子　子ども村事業２回目
（D）中学校１年生　男子　子ども村事業４回目
（E）中学校２年生　男子　子ども村事業４回目

調査に参加した５人は、同じ「子ども村」事業を経験しているということもあり、全くの初対面ではなくＡとＢ、ＤとＥが比較的仲がよく、（C）は他の人たちと知り合い程度でそれぞれのあだ名（ニックネーム）は知っているものの、学年やフルネームについては知らないという状態であった。

調査時間は２時間程度で、そのうち30分は、インタビューアーが話を振りながら自然な形での自己紹介を促し、リラックスできる雰囲気を作るために使用した。残り１時間30分を使い調査分析を開始した。

話の流れは、「自己紹介」→「子ども村での楽しかった体験」→「子ども村での出来事」→「子ども劇場でのみんなの姿」→「それぞれの学校での姿」という形で自然と展開したが、そのなかで、特にインタビューアーが注目したのは、（B）が他の友達から相談を持ちかけられた「子ども村」事業でのハブキ（無視、シカト）、それから学校でのグループ化体験のほか、（A）（B）（D）（E）の「子ども劇場」と「学校」でのキャラチェンジ（場の違いによる振る舞いの変化）であった。そこで以下のインタビュー分析はこれらを中心に展開する。なお（C）からは、ほとんど話が聞けなかった。話しかけてもおどけた表情で変な行動しつつ、他者を笑わせるばかりで、この時間で彼の内面に接近することが出来なかったので今回の分析対象から外れている。

３．「子ども村」事業でのハブキ

この話は（B）が「子ども村」事業の際、ハブキ行為の当事者たちのそれぞれから相談を持ちかけられたという話から展開している。「子ども村」事業では、もともと同じ学校に通う子どもたちもいるが、多くは別々の学校に通う子どもたちであり、何度も同事業に参加することによって、関係性を深めていくという傾向にある。そもそもの発端は、同じ学校に通う仲良しの（ｘ）と（ｙ）の関係に今回の事業で新しく（ｚ）が加わったことからがはじまる（すべて女性)。最初は、初対面の（ｚ）を（ｘ）と（ｙ）が受け入れ、（ｚ）は次第に２人に心を開きながら仲良しになり、同事業において３人が仲良く遊んでいる姿を（B）は目撃していたという。しかし、事業半ばで（ｘ）と（ｚ）が妙に仲が良すぎると感じ始めた（ｙ）は、疎外感からか、（B）に対し2人の悪口をこぼすようになった。（B）の視点では、たまたま偶然、（ｘ）と（ｚ）のトイレや買い物のタイミングが２、３回ほど重なっただけで、特に２人で（ｙ）を敬遠しているわけではなかったとしている。しかし、（B）はそのことを（ｙ）には、「ただ偶然じゃないのかなぁ」といった半クエスチョンのぼかし表現を使っただけで、特に（ｙ）の視点について批判的な立場に立たなかった。こうした（ｚ）の雰囲気を感じ取った（ｘ）と（ｚ）は、（ｙ）が自分たちのことをどのように語っているかを（B）に問いただした。（B）は、その時の情況について（ｙ）からの話をオブラードに包みながら伝えたとインタビューでは答えた。（ｘ）は（ｙ）のこの言動を非常に気にするようになり、次第に（ｚ）と距離を置くようになった。そして最終日の船での宿泊においては、（ｘ）と（ｙ）は、お互いタオルで（ｚ）からの視野を遮るように寝床を設置し、完全にハブキ状態となった。そして帰省後、（ｚ）は保護者に対しもう２度と同事業に参加しないし、子ども劇場の活動にも行きたくないと話している。ここで、注目すべきは、（B）と（ｘ）の行動である。（B）は、３人すべてから相談を持ちかけられているが、具体的に彼女らの関係や考え方に対し、一切立ち入っていない。また、

（x）は、（z）と気が合いまた楽しいにもかかわらず、同じ学校の（y）のことが気になり、（y）とのマサツを避けるために（y）と同じく（z）をハブク行為に加担している。

４．（B）の学校体験～グループ化への恐怖～

話の流れは、先ほどのハブキ行為の話の文脈で、（B）での学校体験の話となった。（B）は陸上の高飛びをやっており、背も高くとても活発な印象を受ける生徒であり、（A）からは、「意味もなくすぐ叩く」「怖い（おどけた感じで）」とからかわれながらも、それに対し、すぐに反論するなどコミュニケーションのテンポも速いという印象をうけた。しかし、これは「子ども劇場でのキャラ（性格）」であり、学校ではいつも愛想笑いを浮かべながら自分の考えを決して言わないタイプであると自ら語りだした。特に小学校６年生のクラスでの、グルーピング体験に対するインパクトが強く印象に残っているようで、その当時の様子を語ってくれた。当時６年のころの（B）のクラスでは完全に４つのグループに分かれており、何をするにもその基準で行動していた。（B）は、このグループ化に違和感を持ちつつも、日常的に繰り返されるグループ内での特定の生徒に対する噂話やハブキを目の前に見せ付けられていることもあり、目立つ行為を極端に恐れていた。ハブキをうける子どもの特徴は、弱い立場の生徒というよりは、むしろ集団との意見の対立が多く存在する生徒であった。何をするにしても集団で行動するため、やたらと不満を漏らしたり、自己主張が多い生徒がハブキを受けていたという。そのため、気が弱く自己主張せず他人に判断を預けるような生徒は、特にハブキやいじめの対象とはならなかったという。こういうことが常に日常的に繰り返されていたため、（B）は、とても気が抜けないクラスだったらしく、その当時を話すときの暗い表情が印象的であった。

５．（A）（B）（D）（E）による場の空気にあわせたキャラチェンジ

今回のインタビューにおける全体の雰囲気が和やかであり、生徒たちは沢山の会話を口にした。普段からこのように和やかに話すのかという質問に対し、その原因は、現在通っている子ども劇場のおかげだとみんな口をそろえていう。今回の「子ども村」事業に限らず、子どもたちだけで企画し、実施する活動が同団体の事業では、沢山存在するため、こうした場面にむしろ彼らは慣れているといってよい。インタビューアーとしても（C）以外の子どもたちからは、他の一般的な生徒とくらべ、程度のコミュニケーション能力の高さが窺えた。しかし、こと自分の学校の話になると全員が極端に暗い表情をするのが特徴的だった。特に（D）が見せた、普段の学校での表情が印象的であった。（D）は、年齢が近いせいか、インタビューの間絶えず（C）（E）とおしゃべりをしていた。特に（E）とは気が合うらしく、お互いけなしあいながら楽しんでいた。しかし、学校ではほとんど無表情だという。余りしゃべらない人だと思われているらしく、話す友達も多くないとのことであった。これは（A）も同じであった。（A）もまた、教室の隅で難しい表情をしていることが多いらしく、この間クラスメートから怖い人という印象を持たれていることに気づいたことを話していた。そしてなによりも（A）（B）（C）（D）とのインタビューにおいて一番際立った言葉が「面倒くさい」であった。それは学校の話をする際かならずといっていいほど出てくる言葉であり、「話すのも面倒くさい」「聞くのも面倒くさい」また、「興味をもたれるのも面倒くさい」し、挙句の果てには「学校に行くのも面倒くさい」という感じで、語尾に必ずといっていいほど「面倒くさい」という言葉が並んだ。当初、極端な面倒くさがり屋、あるいは怠け癖があるのか、という視点で再度確認してみると、そうではなく「かなり敏感かつ長期にわたり気を使い続けなければならない状態に疲れ果ててしまい、すべてのことにやる気がおきない」という感情に近いことがわかった。例えば、（A）は、友達から声をかけられるとどう答えるかが色々考えなくてはならないし、愛想笑いを浮かべながら話をあわせているのに、相手が勘違いをしてその部分に関して詳しく話を聞こうと乗り出してきたりする行為が耐えられなかったと言い。また（E）は、

相手の反応とかが「面倒くさい」と相手の反応をみてさらに自分を変えなければならないことに疲労感を感じている様子が窺えた。このように近年における「だるい」という言葉や「面倒くさい」という言葉には、空気を読み合うことを前提として生きていかざるを得ない学校での人間関係の辛さが暗黙的に語られている。

６．まとめ

今回のインタビューによって「場の空気を読む子どもたち」の一断面が明らかにされたとえいる。最初から最後まで和気藹々とお互い冗談を言い、笑いながらインタビューは進行していったものの、自身の学校での様子について話すときの雰囲気の変わりようがとても印象に残った。特に学校関係の話を聞く際に「面倒くさい」という言葉が異常なまでに頻繁に登場する様はとても特徴的であるとともに、この単語に込められている意味の深さに少々驚いてしまった。おそらく「面倒くさい」という単語を使った文章では、例えば、「話すのが面倒くさい」といった表現の際、単純に話すという行為だけに意味が集中するのではなく、「気を使いながら・・・」「相手のことを考えながら・・・」「リアクションを考えながら・・・」「いろいろと興味をもたれてしまうので・・・」といったシチュエーションごとに様々な枕詞が含まれていることが予想される。このように「場の空気を読む」という行為それ自体がなかば日常化し、且つ常識化するなか、これらに疑問を持つことなく、ただ感覚的に「面倒くさがっている」様子がはっきりと窺えた。また、（B）が述べているように、一般的には、自身の意見を持つことなく、周りに合わせることこそが、最良のコミュニケーション手段であるかのごとくとらえられており、付和雷同的で無気力（すなわち他者とのコミュニケーションに疲れ果てた）な生徒たちの姿がはっきりと窺える結果となった。

以上のようにデータとしてはまだ不十分であるが、「空気を読みあう」ことが日常化してきた現在においてこの「面倒くさい」といった言葉がまさに、若者たちの共通認識を形成しているのではないかとの仮説がたてられる。近年における若者たちの「面倒くさがり」文化についての考察を深めることにより、またあらたな少年少女の＜異界＞を覗くことが出来るのではないかと考える。

謝辞：本研究ノートを作成するにあたり、子ども劇場の地区代表者及び暑い中集まってくれた子ども達に感謝申し上げたい。

参考文献

・土井隆義『友だち地獄－「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書、2008年。
・本田和子『異文化としての子ども』紀伊国屋書店、1982年
・門脇厚司・宮台真司編『「異界」を生きる少年少女』東洋館出版社、1995年
・佐藤学ほか編『教育学会年報８：子ども問題』世織書房、2001年